

詩篇 84 篇

0 指揮者のために。ギテトの調べに合わせて。コラの子たちの賛歌

《懐かしき神殿》

- 1 万軍の【主】。あなたのお住まいはなんと、慕わしいことでしょう。
- 2 私のたましいは、【主】の大庭を恋い慕って絶え入るばかりです。
私の心も、身も、生ける神に喜びの歌を歌います。
- 3 雀さえも、住みかを見つけました。つばめも、ひなを入れる巢、あなたの祭壇を見つけました。
万軍の【主】。私の王、私の神よ。
- 4 なんと幸いなことでしょう。あなたの家に住む人たちは。
彼らは、いつも、あなたをほめたたえています。セラ

《主への思い》

- 5 なんと幸いなことでしょう。その力が、あなたにあり、その心の中にシオンへの大路のある人は。
- 6 彼らは涙の谷を過ぎるときも、そこを泉のわく所とします。
初めの雨もまたそこを祝福でおおいます。
- 7 彼らは、力から力へと進み、シオンにおいて、神の御前に現れます。
- 8 万軍の神、【主】よ。私の祈りを聞いてください。ヤコブの神よ。耳を傾けてください。セラ
- 9 神よ。われらの盾をご覧ください。あなたに油そそがれた者の顔に目を注いでください。

《幸いな礼拝者》

- 10 まことに、あなたの大庭にいる一日は千日にまします。
私は悪の天幕に住むよりはむしろ神の宮の門口に立ちたいのです。
- 11 まことに、神なる【主】は太陽です。盾です。
【主】は恵みと栄光を授け、正しく歩く者たちに、良いものを拒まれません。
- 12 万軍の【主】よ。なんと幸いなことでしょう。あなたに信頼するその人は。

「アサフ詩篇」が終わり、次は84～88篇にかけて「コラの子たちの賛歌」を学びます。例外的に、この中で86篇だけは「ダビデの祈り」ではありますが。コラとは、コラ族の神殿聖歌隊の一員を指すようです。10節に「**神の宮の門口**」という表現が出てくるところからも、神殿の門衛の役目を果たしていた人物であったことが窺えます。この詩篇には、遠い異国の地からエルサレム神殿を回顧し、そこでの礼拝を切望している詩人の思いが溢れています。おそらく第一回バビロン捕囚（前597年）のただ中にある人によるものと思われます（神殿がまだ存続しているため）。

本篇にもいくつかのキーワードがありますので、拾い上げてみましょう。

- ①**万軍の主**（1 節、3 節、8 節、12 節）
- ②**主の大庭**（2 節、10 節）
- ③**なんと幸いなことでしょう**（4 節、5 節、12 節）

これらのキーワードを中心にみてまいりますが、他にも豊かな自然を連想させる表現が多く出てきて、何とも優美なイメージを持つ逸品です。

①**万軍の主**

これは、地上のイスラエル軍また天の軍勢を指揮しておられる神を思わせる表現です。敵と戦ってくださる神、イスラエルを踏みこむ者を打ち砕いてくださる神を求めているのです。詩人は、「**私の王**」「**私の神**」（3 節）、「**ヤコブの神**」（8 節）、「**神**」（9 節）、「**神なる主**」「**主**」（11 節）など、豊かな表現をもって神に呼びかけています。

②**主の大庭**

これはエルサレム神殿の比喻ですが、様々な表現で言い換えられています。「**あなたのお住まい**」（1 節）、「**あなたの家**」（4 節）、「**神の宮**」（10 節）、「**シオン**」（5 節、7 節）など。足しげく通ったあの神殿。主の日の朝、礼拝するために身を整え、家族を伴って礼拝堂へ向かう。その当たり前であった営みを取り去られたとしたら。思いがけない災いによって、礼拝でいつも顔を合わせていた兄弟姉妹とパッタリ会えなくなってしまったとしたら。インターネットもない時代です。とりわけ「**神の家族**」としての意識の強いイスラエル人にとって、この淋しさは如何ばかりだったことでしょうか。

「**私のたましい**」「**私の心も、身も**」（2 節）とは、詩人の全存在が神を求めていることを表しています。「恋慕う」という表現は、本来恋人に対して用いられることばであり、それほどに神との親しい交わりに飢え渴いているということです。

「**雀**」「**つばめ**」と、鳥の名前も出てきました。詩人はかつて、神殿の軒下に巣を作っているつばめや、境内で餌をついばむ雀を何気なく見てきたのでしょう。そのように自由に神殿に出入りできる鳥たちが羨ましく感じたのです。

旧約聖書で「**大路**」という表現が出てくるとき、多くは捕囚から解放された民がエルサレムへ帰っていく道のイメージで使われています。

そこに**大路**があり、その道は聖なる道と呼ばれる。汚れた者はそこを通れない。これは、贖われた者たちのもの。旅人も愚か者も、これに迷い込むことはない。そこには獅子もおらず、猛獣もそこに上って来ず、そこで出会うこともない。ただ、贖われた者たちがそこを歩む。主に贖われた者たちは帰って来る。彼らは喜び歌いながらシオンに入り、その頭にはとこしえの喜びをいただく。楽しみと喜びがついて来、悲しみと嘆きとは逃げ去る。（イザヤ35:8-10）

エルサレムへの巡礼の本質は主なる神様を礼拝することです。神の民が本来あるべき場所で一堂に会し、共に声を挙げて賛美する。信仰者は皆、心に「帰る場所」を持っているのです。

③なんと幸いなことでしょう

4節、5節、12節と三回繰り返される表現です。同じことばでありながら、出てくる場所によってその響きは少しずつ変化しています。一回目は恋い焦がれるように、二回目は決然として、三回目はすべてを納得したかのように。詩を詠いながら、詩人の心は神に近づき、思考が整理され、神の臨在を実感するに至っているのです。敵陣の真っ只中で、主の神殿はなく、心の抛り所を失ったような状態で、祈りによって神と交わり、魂に潤いを得ることができたのです。「彼らは涙の谷を過ぎるときも、そこを泉のわく所とします。初めの雨もまたそこを祝福でおおいます」（6節）。人生何があるか分かりません。いつ礼拝の場に集えなくなるような日が来るとも限りません。そのような日にも、心には常に神殿があることを忘れないようにしましょう。10節の有名な聖句を唱えるだけでも十分なのかもしれません。

まことに、あなたの大庭にいる一日は千日にまします。私は悪の天幕に住むよりはむしろ神の宮の門口に立ちたいのです。

神をわが太陽とし、盾とし（11節）、どんな状況下にあっても心にしっかりと抱いて歩んでいきたいと思います。